

直造避妊具をつくる

これまでのように直造らの斗たたかいを眺めてくると、私には改めて彼らが単に度胸がよかったというよりは、大阪人としての権力感覚そのものが異なっていたように思う。

権力は問題であるより、初めから問題にならぬところがあつた。それは歴史的にもそうであつて、何しろ大阪では商人の力が強くて、新年に当つて、まず蔵屋敷の御留守居役が両替屋へ若党仲間を連れて挨拶にあがり、その後両替屋が回礼に行くような土地柄である。幕末の大阪では、大阪城の城代家老じょうだいが居住する二の丸まで見物人が入つていったというから、いかに大阪が平民の都市であつたかがわからう。

そうしたお上をないがしろ(?)にした習わしは明治以降もずっと続いており、ことにアナキストに受け継がれて、お上の経営する留置場へ放り込まれたり、裁判にかけられることを何とも思わないような風習をつくり上げていった。吉三なんぞ、「退職金は留置場でとるようにせにやあかんのや」と組合員をアジっていたのである。

のみならずお上をないがしろにすることは、時の権力への潮ミステイフイケーション 笑 あるいは戯画的行動とも結びついてしまう。例の山辺健太郎の回顧録には、大正期の大阪の面白いアナキストがでてきて、マーちゃんこと中尾政義なかおまさよしなんぞというのは、神聖なる(?) 法廷においてフリチン姿になっているのである。その昔、裁判所の法廷には廷丁ていていという(今の看守)うるさいのがいて一々注意するのであるが、ある日中尾はすっ裸かの上にオーバーコートを着て行った。すると案の定、廷丁はオーバーを脱げという。中尾が「寒くて仕様ないから、着てもええやないか」といつても聞き入れない。それで二、三の押し問答の末、中尾が「よっしゃ、脱いでやる」とばかり、オーバーを脱ぐと下はすっ裸かであったのには、法廷中みんな大笑いであった。

直造の留置、法廷感覚もそんなようなものであったと思えば宣しい。彼らは直接中央権力と向かいあっている、東京人の運動家の謹厳さや悲壮感からはまったく解放されていた。そこに斗たたかいを持統できる秘密の一端があったと思われる。

話は前後するが、大正九年(一九二〇)という年は、大阪でも社会主義運動が本格的に復活し、それが労働組合運動と組織的にも結びつき出したという意味で、記念すべき重要な年であった。その具体的形としての社会主義同盟には、社会主義者の側ではアナキスト系が、組合運動の側ではサンジカリスト系が何れも先頭になって活動した。そうした盛り上がるの過程で、短かい生命(三、四号)ではあったが『関西労働者』が誕生してきている。

社会主義同盟設立(大正十二、九)に先立っては、五月二日(日曜日)に東京上野公園で日本最初のメーデーが開かれている。大阪でも東京に対応して行なわれたが、その日の直造を壊しく回想している人がいるので引いておこう。

第一回全国メーデーが近づく。日本の労働者にもいよいよメーデーが実施されたのだ。この一日だけが許された私たちの祭典である。……メーデーのスクラムは四列縦隊に組まれ、腕と腕とが鎖となって連がり、延々一里(四キロ)もつづくメーデー。黒旗を先頭に、私たちアナキスト連盟の同志の列が集合地帯の中之島公園から天神橋、さらに南へ一直線、松屋町筋を往き、天王寺公園に向って進む。

逸見氏の家はその広い松屋町筋にある。あと二、三丁も南行すれば、市電天王寺公園前に出る。スクラムは終結地に近づくくと、益々意気がたかまる。松屋町筋ではどの商家もバケツに水を用意して道路に出し、あせだくの労働者にのませる。逸見氏の家でも四斗樽が三杯、バケツも多数出して砂糖入りの氷水をのませる。この水は特別にうまい。デモ隊の労働者が列をはずしてこの甘い冷水にのどをうるおす。

いつの間にか直造氏が、向う鉢巻で若い衆といっしょに、茶碗やグラスに氷水を入れてやる。「よいしょ」「さあ、のめ」まるで五、六人の若い衆と家族も交えて直造氏の家の前は、メーデー参加者の黒山が築かれる。長列が乱れてもここでは警官隊の乱暴もおこらない。所轄戒署員もおだやかである。直造氏の威光のせいであろう。

メーデーに参加している直造氏が、いつの間にか氷水の接待をはじめたのか、まるで考えるすきもなく、一瞬、労働者をいたわっている風景なのである。(『新過去帳覚書』中本弥三郎)

直造の面目躍如たる文章である。

社会主義同盟は翌年五月に解散命令が出され、八月には暁民共産党の結成をみるのであるが、アナとボルの論争対立がかなり進んでいる時期に、直造らはその論争の外にたつて両者の調定に努力していた。アメリカの労働界をみてきた直造とすれば、まだ育つて間もない日本の労働界の分裂的狀況が情けなくて仕様なかつたのである。それでまだ十七、八の吉三の青白い革命論に對してこう言っていた。

「わいはアメリカでエマ・ゴールドマンの話聞き、IWWのストもみてきた。それからすると日本の革命運動は五十年遅れている。今日本の労働組合は三万人といわれているが、その中、海員、鉄道、兵器官業、タバコ等の組合は、ストをやらない条件で組合が結成されている。それを除けば日本の組合は、たつた一万人足らずの人数ではないかい。内輪ケンカなんかしているヒマに、もつと仲間をようけ、つくらなあかんのや」

その仲間をつくる運動のためにこそ、自分はあると考えていたのであろう。それは労働運動史にあわせてみれば、なまじ特定のイデオロギーを持つことより大事なことであつたには違いない。その意味では彼をアナキストというよりは、もう少しソフトな表現でリバータリアン（カミュ、シモーヌ・ヴェエユ、マルチン・ブーバー等）と呼ぶべきなのかもしれない。

大衆活動家としての逸見直造はまた、この時三月五日、来日したサンガー夫人の説にも積極的に賛同している。

サンガー夫人はニューヨークに生れ、小学校教員、看護婦として貧民街で働くうち、多産が多く貧困を招いていることを知り、避妊法を教えて産児制限の運動を始めた。しかしアメリカでは法律で避妊を禁止しており、キリスト教精神にもそむいていたため、投獄されるなどして各方面の迫害を受けた。にも拘らず、^{かみか}ゴールドマンらの協力を得て運動を進め、世界各国を遊説して廻つた。その世界遊説行脚の途次、日本にも立ち寄つたのである。

むろん日本でも当局の干渉を受けた。しかしサンガー夫人を支持する進歩派は歓迎し、大阪でも常に貧民と接触している直造は、夫人の説に賛成するだけでなく、実際に産児制限運動を試みている。その頃の日本にはまだ避妊具などはなかつたのであるが、直造は早速夫人の著書を読んで、ゴムの pessary や金属のスプリングつきの子宮口閉鎖の器具などをメーカーに頼んでつくらせ、そしてそれをまた組合の奥さん方に売らせることで、生計の一助にさせていた。

人助けに墮胎まで行なう

しかし社会的には産児制限を主張した直造ではあるが、金づくりのうまい自分には制限は必要ないとしてか、本人が死んでからよそにつくつた子供がぞろぞろでできた。

泉府中の宮下小政との間に一男一女、奈良県平群村出の水原ハルエとの間に二男一女、正妻ならえとの間の子供二人も入れて、計七人の子供を設けているのである。

この間の事情を吉三さんに聞いてみると、直造は艶福家には違いなかつたが、映画館時代の看板描きの嫁はんで、お婆さんを世話するのを副業にしているのがいて、それが次々と新口の話

持ってきたのだそうである。大阪ではこういうのを「ちよちゃんのおばはん」というが、おばはんは貧乏人の出戻り娘で、器量のよさそうなのをみつけてきては金持ちの旦那に取り持ちしていた。

その頃お婆さんの「相場」は三十円、女工の月収の倍くらいにはなった。そして一人世話すると、〈ちよちゃんのおばはん〉は女の方から一割チョンと天引きして稼ぐ。お婆さんはお婆さんで、他にいい口の話があれば、またお婆はんとは相談づくで旦那を乗り換える。昔のこうした世界は意外とドライなものであった。

小政とハルエもそうした事情でできた女であるが、五人もの子供をつくっているところをみると、他の女と違って余程気に入っていたということであろうか――。

一方ならえの方であるが、先述した通り小政が死ぬや、「二人口も三人口も同じや」と小政の子である三郎を自分の息子と同じように育てた人であるから、しっかりと知っている。大体昔の女は夫が妾を持つのは男の甲斐性ぐらいのことは聞かされているから、夫が浮気したからといってもう驚きやしない。そうでなくても、ならえは自分の人力車製造の父親の行状で散々この道に關して体験させられていた――。

その意味では直造の大衆活動は、女性関係を含めて妻ならえに負っていたことになる。

大衆活動という点では、吉三も中々のものである。今風に大衆活動だの市民運動だのというところ、何か他在的で、意識的なものを感じさせるが、そういうことではなくて、本人のもとと素質的なものである。吉三さんは戦争中町の町内会長を勤めていたということであるが、つまり社会主義

義者以前の子供時代にスラム街のガキ大将であったように、大人になっても、社会主義者の肩書きをはずしても、町の世話やきとして大いに通用する人柄であったということである。

このことは一見何でもないようでも、大事なことがらのように思われる。今日の社会主義者にあつても、一度は社会主義をはずしてなおかつ自分がどの程度に、「社会主義者」であり得るかを検討してみるべきであろう。

戦争中の町内会長時代には、例えば夫が出征中の町内の奥さんのお腹が大きくなったりすると、自分で墮胎まで引受けてやっているのである。もつともこれは借家人同盟時代からやっていることであつて、墮胎件数数十人もあるというからまさに驚きである。

吉三がこの方面の知識を持つに至ったのはむろん親父譲りで、サンガー夫人の説に影響されたことである。

そうでなくとも身の廻りで、「結婚してもいないのにお腹大きゅうなった、どないしたらいいでしょう」などという相談が持ち込まれたら、何とかして助けてやらねばならない。初めは父のアメリカ時代の友人で小児科と産婦人科の医者をしている人のどこへ連れていったが、次々と頼みにゆくものだから、医者の方もそのうちに、「警察に搦つかまったらこわい。やり方を教えてあげるから、自分でおやんなさい」といい出した。

それで練習のために、今日は墮胎するという日に見に来いというので、見学しにいった。医者の側かたわらで、先生と同じ白衣着て、恰あたかも助手のようにピンセットかガーゼを持って、立って目前の墮胎の模様を眺めているのである。

当時はもちろん法律上、墮胎が禁止されている時代である。むろんそんなことする奴がないからであるが、しかし医者は禁止されていても、素人が医学上の知識を得て、自分の嫁はんとか娘にやっても罰するとは書いてない。その限りでは、吉三の墮胎は合法的であった。ただしお金貰ったらダメ。無料でしてやる。

その代り、二カ月から三カ月経つてから、二人を呼び出し、女の方には「体にさわらないか」と聞き、「今度また妊娠したらいかんから、こんなんせい」とペッサリーとかリング（その頃は薬屋に売っていた）をつけることを教え、性交前には泡のたった石ケンにホウサンちよつと混ぜて、ねばねばした奴をヴァギナに塗れば、妊娠率が少ないことを聞かしてやる。

そして女を帰した後、男の方には、「どうや、ゲン直しに女買いにゆこうや」と、十円ほど金こさえさせて女郎買いにゆく。これが墮胎の報酬といえば報酬であった。

一度そういうことを始めてみると、世間には誰の子やらわからぬ子を生む女が多いかを知らされた。三カ月に一人はやってきた。ルートはむろん借家同盟の借家争議で世話になった人のような、安全な関係だけであるが、それがたまりたまつて数十人の件数になったという次第である。

吉三の女助けといえは、現在の奥さんも女助けによって得たものである。

吉三は戦争が押しつまつてくるや、日本にも革命起きるんやないかと思つていた。それでその時に備えて大それたことは考えていなかったが、せめて嫁はんだけは貰わんとおこうと思つていた。それが昭和十一年（一九三六）、子供時分の友達で親子揃つてバクチ打というのがいて、親父が死んで自分の妹を売ろうとした。それで「俺が解決したる」と妹を逃がして、組合の事務所に隠

しておいたところ、兄貴が妹を誘介したと警察に届け出た。

すると警察は喜んで、事務所へ妹を連れ出しにきた。

しかしその前に妹には、二十四才以前で自由入籍できないので、「俺の嫁はんになって俺と寝ているというとき」と聞かしてあったので、その通りいった。「十九や二十で、まだ未成年やないかい」と警察は迫つたが、「籍なんかどうでもよろしい。夫婦には変わりないんやから——」と頑張つたので、とうとう警察もそれ以上干渉できず引揚げていった。

この友達の妹がそのまま吉三の許に居坐つたのが、後の女房ということである。

釈放後のあつけない死

吉三さんは「労働運動、思想運動というても、こんな具合に生活の内容にまで触れてゆくのが運動の仕方だった」といわれる。働いている生活者と肌をすり合わせてゆくような運動、今風にいえば「スキン・シップ」のデイープ・ボランタリイが直造らの運動の土台をなしていたのである。

しかしまだ四十年代前半の直造は、大正十年（一九二一）頃から、からだの不調を訴え始めた。頑丈な直造は、過労のせいだろうとタカをくくつていた。それが大正十一年に朝鮮へ借家問題で飛んで行って留置され、帰ってきて、再び翌大正十二年八月の盛りに投獄され、出獄して一カ月足らずの裡に、急拠あゝの世へ逝ってしまった。

投獄の背景はあまりに活発な「借家同盟」の動きに、この辺で痛めつけておけという当局の

配慮であったが、直接的には社会主義者のリストに載っている某の裏切りによるものである。某は金がないままに借家人のところへ行つて同盟費を払えといつて、その集金した金で遊んでいたのであるが、いよいよ生活がつかまつてきて特高のところへ行つて相談した。

その結果、借家人が某と逸見の両方に謝礼として支払った供託金を、逸見が某に渡さず横領したという芝居を仕組んだのである。警察はその男一人の証言では信頼性が乏しいから、借家人に強制して証言を書かせた上で直造の逮捕に踏み切った。直造の家は箱屋で儲けているわけだし、供託金による謝礼は本人が供出するといわねば絶対受けとらぬことにしていたのであるが、まるとヒツかけられてしまった。

もつとも直造は、入獄中といえども仕事が忙しいからと休んではいけない。警察に留置される時には、書類の一杯つまつたカバンを持って入り、毎日、一時間ぐらい特別に出してもらつては仕事を続け、また戻つては、ブタ箱入りしていた。

どうやら震災の混乱も収まり、上京して騒ぐ恐れもなくなったということで、直造が釈放されたのは九月末である。出獄した直造は、以前にまして忙しかった。なぜならその頃、ちょうど有名な梅毒薬の有田音松（有田ドラッグ）が、電車の停留所近辺の便利な土地をみつけてはそこらの中の家を買収していたからである。有田音松の執拗さは猛烈なもので、「借家人同盟」の直造としては、血みどろの争いを行なつていた。その忙しいさ中の十月二十三日、中央公会堂地下で大矢省蔵と食事をとつている最中急逝したのである（享年四七歳）。

父親の死のあまりのあつけなさに吉三は、投獄中に毒を盛られたのでは……と、大阪の大学病院で死体の解剖をしてもらつた。その結果、死因は心臓弁膜閉鎖とわかつたが、事前に病院側は遺体の立派な体格に、全部解剖させてくれと許可を求めていた。息子の吉三は「オチンチンとキントマだけは残しておいてやあ」と申し入れ、直造の遺体はその通りの体になつて、病院から車で戻つてきた。

十月二十五日、幅広い直造の活動を反映して、大阪の全労働団体と全社会主義者による合同葬儀が営まれた。その盛大なることは冒頭に述べた通りで、恰も叔父逸見東洋の葬儀にも似通っていた。東洋の葬列の写真は今残っているのでそれを見ると、延々五丁も続く葬列の先頭には、財閥の住友・鴻池両家の名札もみえ、その後には人力車の隊列を率いてのデラックス版葬儀となっている。直造の場合も同じで、その日ばかりはアナもボルもなく、およそ五百人の同志が集まつた。

葬儀委員長には、木本凡人きもとほんじんがなつた。

この木本凡人という人も大阪の市民運動では特記さるべき人で、直造と知り合つたのは、大正十年（一九二二）頃である。木本は、自分のやつている青十字社主催で、天王寺公会堂で「住友財閥」攻撃演説会を開いたことがある。その時逸見親子と山田正一らは、市内に貼り廻されたポスターをみて早速聞きに出かけた。

この演説会の主催者木本凡人は、当時社会主義者ではなかつたが持ち前のヒューマニズムから、住友が不当に私有地化して大別荘を建てている茶臼山を解放せよと迫つていたのである。その演説を聞くなり、直造は待つてましたとばかり飛び入り演説を申し込んだのであるが、演説会は開

会してじきに解散を喰ってしまい、一蓮托生で木本夫婦も逸見親子も共にブタ箱に放り込まれてしまった。

留置場の中で直造は木本夫婦を説得して、社会主義同盟に加わらせた。

そんな関係で、木本凡人が葬儀委員長を引き受けた次第であるが、他にアナキストの武田伝次郎の他、関西組合同盟の阪本孝三郎、総同盟の野田律太、マルキスト系の九津美房子（後に三田村四郎の妻となる）らが各派代表委員となって、文字通り全社会主義者、労働者、運動家の合同葬ということになった。その人民葬儀の盛大さについて大阪の新聞が特報したことは、冒頭において述べた通りである。

ところで直造に死なれて途端に困ったのは、むしろ息子の吉三である。当時まだ二十才になっただけというのに、父親の築いた運動の全責任が自分の肩にのしかかってきた。到底父の力量には及ぶべくもなかった。それでも係争中の借家問題については、俺が責任持つて解決したるとみよみまねで面倒みた。

しかし彼の気持ちは、父親生存中にすでに多分にサンジカリズムの傾向に心魅かれていて、その辺が親子相似していて相異なる面でもあったのである。

大正十一年（一九二二）九月三十日、大阪の天王寺公会堂で開かれた労働組合総連合の結成大会は、周知のように組合同盟会の自由連合論と総同盟の中央集権論とが真正面から激突。遂に当局から解散を命じられた。いわゆる「アナ・ボル論争」のクライマックスといわれるものである。この当時、自連側の気持ちとしては各組合の自主性をあくまで守ろうとする考えはあっても、組

合運動を決定的分裂や対立に持つてゆく意志はなかった。

山辺健太郎もいつているように、偏狭なセクシヨナリズムは絶えず強権的ボルシェヴィキの側から持ち出されたものである。

しかし無強権、自由社会思想をとるアナキズム、サンジカリズムの側にも次第にセクシヨナリズムの様相が濃くなってきた。もともと外国では社会主義プロパーとしてのアナキズムと、労組運動としてのサンジカリズムは別々のものであるが、日本では主として大杉栄によってアナルコ・サンジカリズムという形で融合化していた（真実はどちらかに身を寄せることを迷っていたというべきだろうが）。それでも実体内容の違った両者（一方は思想と革命、他方は実践と斗争というべきか）が完全に和解すべくもなく、むしろ差異が濃厚になってきていた。

その中であつてまだ十九才の吉三は、単なるアナキズムの思想にとどまり得ず、やはり組合運動に足場を持ち、そこでアナキズムの理論を実践化してゆく道を選んだということは、彼の素質や環境からいつて極めて必然的なことであつたとせねばならない。吉三はこの十一年九月には新谷与一郎らと関西紡績労働組合を組織したり、他の組合運動とも積極的に関係を持つたりしてアナルコ・サンジカリズムの斗士となつていった。

それで父親の直造が検挙された時も、実は東京芝協調会館で開かれる機械連合労働組合の大会に出席し、且つ関東労働組合同盟会、関西労働組合同盟、それに無所属系組合を集めての、「全国自由労働組合」を結成するために上京して、大阪にはいなかった。そこへ突如関東大震災（大正十二・一九二三）が発生し、這這の体で東京を脱出して、中央線を廻つて一週間がかりで大阪へ

帰ってみると、今度は父が検束されて家を空けていたという次第である。

俺は金とる名人やでえ

アナルコ・サンジカリストとしての逸見吉三の運動歴は華々しく、それだけで大阪の労働運動史の特殊性を現わす態のものである。

所属は昭和十二年（一九三七）頃までは大阪自由総合労働組合にあり、全国組織としては全国労働組合自由連合会に加盟して、自ら関西連合会の代表者を勤めていた。全国自連は全国で数万人、大阪総合労組は最盛期には五千人、解散間際でも二千三百人いたから次から次と問題が組合へ持ち込まれた。組合員ばかりでなく、非組合員も工場で腕を落したりしてやって来た。

吉三さんは自ら、「俺は金とる名人やでえ」といわれる。そういうケガしたような労働者がやって来ると、警察へ届けていたので、まず警察へ告訴する。それだけでも効果があり、大低は有力者を頼んで「逸見さん、頼む」と妥協しにきた。妥協してくれば適当な額をとってやって、組合費を一年分とか二年分とか収めさせる。組合費はせいぜい五十銭か一円だから、二年分貰ってせいぜい二十円ぐらいのものである。

これは親父直造のやり方と同じである。問題を解決してやっつては被害者から組合の分をもらって資金をつくり、相手の会社側からは絶対貰わない。いわば労働者のもめごと引受業である。組合員も小なりといえども争議で鍛えられた奴ばかりなので、動員力がある。何かといや、三十人や五十人すぐに集まる。それで総同盟でも、逸見一派といって運動面では一目置いていた。

まったくその直接行動の鋭さにおいては目を見るばかりのもので、彼らはよその組合の大会でもワアと押しかけてゆく。一人引っぱられると、みな引っぱられるまでやる。巡査とぶつかれば、あらかじめ旗竿の旗に印刷用の真黒なインキを塗っておいて、その上に赤でA（アナキズム）と書いてあるのを振り廻して派手に応戦する。旗に触れた巡査は顔や手が真黒になってしまう。それで巡査も、「アナキストどもを検束する時は、氣いつけいや」とあらかじめ打ち合わせていた。全員留置戦術というのは、例えば会社が争議の交渉にも応じようとしない時には、社長の家なり事務所なりを徹底破壊して、全員逮捕されてしまう。そしてその晩にはみなで大暴れすると、署長もやかましくて敵わんから、組合の役員だけ出して会社側と交渉してこいという。それが目当てである。会社側も警察署長命令で争議交渉に來たとあつては、応待しないわけにゆかなかつた。これで被留置者の勝利が決まったようたものである。

吉三はかねて大杉が、「何人集まったら運動始めるなんていうのはダメだ。マラテスタはたった二十五人からあんな大きな斗争起こした」と言ったのに教えられて、労働者にも三人でも五人でもいいから、組合の旗上げせいと煽動していた。すると旗を早く上げすぎて、組合のできんうちに解雇されるのがいた。そうなれば押しかけていって、一年について退職金二十日分くれと交渉する。二十日分あれば、一円五十銭の給料取りで、月三十円、十年いれば三百円だから半年は喰えた。その間に新しい職を探すのである。

それで中には組合を利用した、解雇手当て専門の奴も出てくる。どこか会社へ入るなり、その日の朝早く組合へ「オルグ用のピラくれへんか」と貰いにきて、会社の門前で通勤してくる労働

働者たちにまく。そうすると会社は直ちに首にするが、例え三日勤めていても解雇手当てを二週間分払わねばならないから、差引き首で得することになる。その余った金でぶらぶら遊んでいて、また就職し、ピラをまき、解雇手当てをとるのである。

そんな奴でも、やっている間は三人でも五人でも現実に組合員つくってくるから、吉三らは「構わん、やれい」と援助していた。

大阪アナ系労働者の斗争は、争議の際には会社の社長の息子をパシつとひっぱたいて、社長に恐怖心を起こさせてでもとるといった、えげつないものであったが、それだけ当時は労働者の人権が無視されていたということでもある。労働者を勝手に首切る、退職金は出さない、交渉にゆけば警察につかまさせるといふのでは、残る手段は実力しかなかった。

その最も戦斗的分子が、吉三らアナキズム系の労働者たちであったのである。

昭和六年（一九三二）の大阪アルミ争議の時には、忠臣蔵みたいに七、八十人で夜襲をかけ、大門を「ヨイセ、ヨイセ」とぶち破り、邸宅内に押し入って家人が大騒ぎになるのも構わず、戸建具からたんす、火鉢に至るまでめちゃくちゃに破壊してきた。この討入りでは「前科のある奴だけ、責任とろう」ということで、吉三は未決ともに一年半入獄していた。

また映画館のトーキーの機械も、随分つぶしてやったそうである。

というのは、吉三は映画館を手伝っていたから映画関係に知人が多く、「映画演劇人同盟」というに加わっていた。それが時代が移ってトーキー時代になるとともに、仕事が増えてきた。弁士不必要で、次から次首が切られたからである。一流の弁士も知っているのが沢山いたが、それ

らを含めて毎月五十人、百人と首が切られたのである。それも田舎はなかなか進まないが、大都市はどんどんトーキー化し、弁士は街頭に放り出された。

それでヨーロッパ資本主義初期頃の労働者による機械破壊と同じように、「撮影室へ押し入ってトーキー機械を破壊するのであるが、時に撮影室ごとぶち壊すこともある。ぶち壊すといっても撮影室となると大変である。爆発すると危ないから、室のセメント壁は三十センチにも厚くしてある。それで（どういう意味か）映画を写す穴から水を一升びんにつめ十本も流し込み、建設工事用のニューマチックを持ってきてバリバリ破る。

破ってゆくと、セメント壁の中はただレンガだけ積んであるのではない。内部にはでっかい鉄板がもう一つ壁になっていてこれも破らねばならない。それで大勢で苦心惨胆して、小さな撮影室を破るのに丸二日もかかったそうである。

むろんこれも器物破壊で起訴される。それで破るとすぐに、「金集めるさかいに誰か入る奴いないかあ」と入獄希望者を募る。「よし、じゃ俺が入る」という奴が出れば、後の面倒はみることにして当人に責任を負ってもらうことにした。

しかしこうした激しい実力行動も、昭和も七、八年頃から次第にやれなくなった。

昭和十桁過ぎて十二年（一九三七）ともなると日中戦争が始まり、官憲の労働運動圧迫も極に達した感じであった。精神的に働いた運動家もどしどし転向してしまい、大衆的に思想を伝える余地もなくなった。それでも大阪で最後まで残っていたのは、中間派左派の総評議会、今の解放同盟の水平社、市電の従業員組合、それに吉三らの組合であったが、それらも遂に産業報国会への

吸収合併ということで落城して、吉三も運動から手を引いた。

昭和十四、五年頃から四年程は吉三は古本屋をしていた。本は戦時物資として集めているよせ屋へ行つて、その中から売れそうな本をひっこ抜き、一貫目五十銭ぐらいで買ってきて、それを二、三円で売るのである。中には何十円もするような掘り出し物もあった。

戦争中は、仲間の紹介で、日本航空という飛行機会社の道具係りをしていた。

そこへ敗戦である。

例え与えられたものにせよ、一切が民主主義の世の中である。昭和二十一年（一九四六）八月、いち早く総同盟が再結成されたのに次いで、産別会議も同月結成、十二月には日労会議（日本労働組合会議）が結成された。この日労会議は戦前のアナキスト相沢尚夫あいのりたかおが書記長となり、逸見吉三を争議部長として、再び労働界では突出した動きを示し始めるのである。

今日も見習うべき特性

かく大阪における逸見親子二代あるいは三代にわたる社会革命のための歴史を眺めてきて、改めて感銘受けざるを得ない特殊性は、

一、生活者への同胞的愛情

二、自分ら自らの直接的行動

三、狡猾なまでの知的アイデア

——ということではなかるうかと思う。

むろん彼ら自身、その在り方において欠点なしとはしない。しかもそれが現実の場面に応じてあるいは変形し、屈折した形を取らざるを得ないのはやむを得ないことである（所詮例外なしの法則などというものは絵空事に過ぎない）。しかし三代にも渉わたつてのこの人間史の中で、同胞への情の厚さ、直接行動の鋭さ、アイデアの巧みさはどうしようもなく刻明に浮かび上がってくるのを、認めざるを得ないだろう。

改めてその事実を問えば、摂政官ヒロヒト狙撃事件なんばだいすけの難波大助なんばだいすけが出かける前に大阪で逸見の家を訪ねて金二十円也を置いていったそうである。その金を使うことなくしまっておいた吉三は、ギロチン社事件の入獄者に揃いの浴衣をつくってやって、差入れしたという。その話を聞いた和田英吉氏は、「本人はあまり長く持つてりゃ小遣いに使っちゃうだけだから……、と何でもなげに語っていたが吉三ちゃんの思いやりには感心しましたネ」と洩もらしていた。

ついでに和田氏は吉三と一緒に留置された時のことを回想して、「あの日頃大阪弁で口当りのいいしゃべり方をする吉三ちゃんが、本気で、顔色変えて怒ったのには驚いた」とも言っておられた。それは他にもうひとり向かい側の監房に背中なかの曲がった、仲間には爆弾しよって歩いてるんやないかと冷やかされていた山田正一が入っていたのであるが、巡査がこれに殴りかかろうとした。その途端、状況をみていた吉三が血相変えて、巡査に「そいつは普通の人間の体やないんだぞうッ」と怒鳴って止めさせた。

「鉄格子の中に入っていてどうにもならないのに……、そういうところはまったく親父譲りでしたね」とこれにも和田氏しきりに感心してひとりで背いていた。

直接行動の鋭さにおいては、もう今更述べるまでもなからう。

ただしこのことに付け足せば、親子とも間接を排した直接行動家であったといえども、人命殺傷のテロを行なわなかったし、否定していたことである。このことは非常に今日的意味合のあることで、彼らは例えばイギリス百人委員会がとる「非暴力直接行動を争いの基調とする」の新宣言や、W・R・I（戦争低抗者インター）ローマ大会の「非暴力直接行動こそ、人民固有の原理であり、方法である」という表明と同じ姿勢を持っていたのである。

そのことは殊（こと）に吉三の体験において明瞭であり、彼は大杉の個人的復讐である福田雅太郎大将狙撃事件に金を出したというだけで巻き添え喰って、求刑八年の判決を受け、大正天皇死去、昭和天皇即位で、実刑二年数ヵ月獄中で暮している間につくづく感じたことである。

そのことについて吉三は、
「私が入獄していた二年余りのあいだに、外部の社会主義運動も労働組合運動も、急速にすがたをかえていた。……アナキズムやアナルコ系組合の勢力は、以前とちがってひじょうによわまっていた。入獄中に私は、個人的テロリズムのばかばかしさや、大衆運動の分裂主義のあやまりをふかく反省させられていたが、出獄後の運動の実態をみて一そう自分の正しさを確信させられた」（戦前大阪における社会主義運動の思い出）
と語っているのである。

最高権力にある者の暗殺（テロ）を計ることの反動が余りにも大きいことは、すでに大逆事件において経験済みのことであるが、大杉虐殺後の和田久太郎、村木源次郎、中沢鉄、古田次郎らのテロリズム実行において一層明白であった。テロの発覚ごとに関係者はいうに及ばず、直接無関係の者までが捕われ、弾圧された。

ことに、昭和十年（一九三五）十一月の高田農商銀行事件に次いで芝原淳三射殺事件は、日本無政府共産党の全国一斉検挙呼び起こした。これが結局、大阪でもアナキズム運動のとどめをさしたようなものであった。この当時大阪にいた若い元氣なアナ系の者は、殆どこの無政府共産党事件でマークされてしまったので、事件の後大阪で運動を受け継ぐべき青年分子がいなくなってしまうたのである。一方、テロ派のリヤク屋（掠奪）としての墮落振りもまた目にあまるひどいものであった。彼らはリヤクった金をまるで遊興の巷（ちまた）で浪費していた。

それで吉三は、「明治、大正、昭和と、運動の極左的なあやまちを何べんも見たり聞いたりしてきた私は、戦後に火災（ピン）斗争（ピン）がはじまったときには、『またやったか』と感じたものだ」（同前）とも回想しているのである。吉三とすれば直接そのようには語っていないが、「今日においては非暴力直接行動こそ最高の斗多方法」としておられるものと推測する。

余談ではあるが直造は小学生の息子に、天長節等の祭日は学校へ登校させなかったという。天皇家の祭りは天皇家だけでおやりになればいいので、われらには関係ないというのである。それで吉三は祭日の日にわざわざ学校へ行って、みんなに映画のタダの券を配って、全員引き連れて自分の館の映画を観にいったこともある。非暴力直接行動とはそうした日常世界の、ほんのささいな中にも潜んでいるのである。

ただ行動力があるばかりでなく、絶えず（たなか）斗い方の新しい戦術を生み出している。その方法の巧

みさにおいて、斗争の技術家ともいへば達者なものであった。尾行ひとつまくにしても、例えばここでまこうという箇所へ来ると、巡査にフンドシか古シャツでも入った空カバンを持たせておく。すると向うは大事なカバン預っているのだからまさか逃げやしまいと思つて、いわれた通りカバンを持って待っているのであるが、その間にかねて約束の家の裏木戸からズラかつてしまふ——といったやり方をとつたりするのである。

真に巧妙且つ老獪なる戦士であつた。

しかもこの同胞的愛情、非暴力直接行動、知的方法の三者は決してバラバラに在るものではなく、実は三者互いにつながっていることを思わねばならない。即ち愛情において戦斗的であり、同時に非暴力であり、知性的である。強権による革命は、必ず強権の政府を生み出す。無強権の自治を目指す以上、その手段として無強権であらねばならない。その無強権革命の手段として、その底に人間愛を秘め、創造的戦術に裏打ちされた「非暴力直接行動」こそ現代最高の方法であるはずのものである。

もとより、「非暴力直接行動」といっても、どこまでを暴力とみなすか？ 器物破壊すら暴力とみなすとなると、非暴力の意味合もかなり変わってくることになるうし、さらにこのような方法によつて本當に革命が達し得るか否かとなると、未だ不明というより仕方ないが、それにしてもなお現在考えられる限りでの最も有効な手段であると判断される。

もともと市民Ⅱ住民、あるいは労働者Ⅱ生活者なるイメージは、相互扶助と直接行動（ふきそ）うじから食事まで）と創意工夫の象徴制を持つている。そうした市民あるいは生活者の最も刻明

なイメージと、逸見三代の流れに横たわる資性とがモロに合致していたのである。その意味でマスコミの場を遠く離れて、埋もれている逸見直造が今掘りだされることは、まったく現代的意義のあることと思われる。